クリーン四国

No.1234
2023年
1月号

令和５年（2023年）局長年頭挨拶

【詳細は2頁】

■「朝日の四万十川」　丸田　泰史

四万十川は四国内で最長の川であり、本流に大きなダムがなく「日本最後の清流」と呼ばれており、日本各地から観光客が訪れます。

目　次

・令和５年（2023年）年頭挨拶 …… 2
・林業大学校の学生による地拵えやネット張り …… 4
・千本山登山学習 …… 5
・「電動クローラ型一輪車と金網製獣害防護柵を使用した造林コストの削減」現地検討会を実施 …… 6
・高知県林業土木協会ボランティア作業の実施 …… 7
・幡多農業高校生徒が自然再生事業地で作業体験 …… 8
・「奈半利小学校」野根山街道 …… 9
・松野西小学校で年間を通した森林環境教育を実施 …… 10
・「丸太切り」で木工品をゲット …… 11
・「梼原松原（久保谷）セラピーロード整備」に参加して …… 12
・旧西ヶ方小学校でクリスマスリース作り …… 13
・令和４年度　刃物取扱い研修の実施について …… 13
・【新規採用者の研修日記】 …… 14

四国山の日

四国森林管理局

高知市丸ノ内１丁目３－30
ＴＥＬ 088－821－2052
ＦＡＸ 088－821－4834
Ｈ　Ｐ http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/
E-mail shikoku_soumu@maff.go.jp

令和5年（2023年）年頭挨拶

四国森林管理局長　遠藤　順也

令和5年（2023年）の年頭に当たり謹んでご挨拶申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が依然として社会・経済に影響を及ぼしている中、いわゆるウッドショックやロシア・ウクライナを巡る情勢、急激な円安など、森林・林業・木材産業を取り巻く情勢はその複雑さを増しております。

こうした状況を踏まえ、令和3年6月に改訂された森林・林業基本計画に基づき、森林資源の適正な管理・利用を通じ、林業・木材産業の持続性を高めながら成長発展させることで、社会経済生活の向上と2050年カーボンニュートラルに寄与する「グリーン成長」の実現に取り組むとともに、現下の課題に的確に対応し、生産基盤の強化による海外情勢の影響を受けにくい木材の需給構造の構築に取り組んでいく必要があります。

四国森林管理局といたしましては、新たな森林・林業基本計画を踏まえつつ、森林を適正に管理し公益重視の管理経営を一層推進する中で、組織・人材・資源を活かし、森林・林業政策全体の推進を通じた地域経済の活性化に貢献してまいりたいと考えております。

特に、海外情勢の影響を受けにくい木材需給構造としていくため、国産材の供給力強化に貢献できるよう、木材需給動向を注視しながら、木材の生産や販売事業等を的確に実施し、地域の実情に応じた国有林材の安定供給に取り組んでいくこととしております。

森林資源の循環利用と林業経営の長期持続性の確保に向けては、伐採から再造林・保育に至る収支のプラス転換を可能とする「新しい林業」の実現を目指し、ドローンなどデジタル技術の活用、高効率・低コスト造林の実現へ向けて伐採と造林の一貫作業、苗木の低密度植栽や大苗の活用、下刈りの省力化などの各種技術の実証・普及、シカやノウサギ等の獣害に対する捕獲や防除対策の実証・普及に努めてまいります。

また、森林経営管理制度と森林環境譲与税につきましては、令和元年度のスタートから4年が経過しようとしており、令和6年度からは、譲与税の財源となる森林環境税の課税が始まります。これまで以上に、市町村や都道府県において、森林経営管理制度や譲与税による取組が積極的に行われることが重要となっていることを踏まえ、四国森林管理局といたしましても、都道府県等との連携により、各種技術の普及を目指した林業事業体等を対象とする現地検討会の開催に加え、森林・林業行政の推進に重要な役割を担っている市町村職員を対象とした研修による技術的支援に取り組むなど、きめ細かなサポートを行ってまいります。

さらに、近年、毎年のように大規模な豪雨災害や土砂災害等が発生するようになっております。四国森林管理局といたしましては、国民の皆様の生命・生活を守るとともに、国土強靱化にも資するため、国有林内及び民有林直轄治山事業の実施、災害時に迂回路として活用もできる国有林林道等の整備、関係機関との連携や市町村への人的支援の実施など、局の組織・技術・資源を活かし対応してまいります。

本年も、四国の国有林が、「国民の森林」として、国民の皆様、また、四国地域の林業・木材産業、自治体等関係者の皆様のお役に立てますよう、地域の皆様と連携しながら、職員一丸となって、業務に邁進してまいりますので、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本年が皆様一人ひとりにとって、実り多き素晴らしい一年になりますよう、心よりご祈念申し上げ、年頭に当たってのご挨拶とさせていただきます。

林業大学校の学生による地拵えやネット張り

〈高知中部森林管理署〉

11月8・9日に、高知県林業大学校基礎課程の学生（16名）を対象に現地実習を行いました。

初日は、現地実習に先立ち、県立林業大学校において座学とシカ防護柵設置の演習を行いました。午前は、四国森林管理局技術普及課宮崎企画官（民有林連携）から、今回の実習内容と作業時の注意等について講義が行われ、午後からは、敷地内の芝生で当署職員11名の指導で防護柵設置の演習を行いました。学生にとって初めての作業のため、一つ一つの作業に手間取る姿も見受けられました。分からないところがあれば職員に質問しながら熱心に作業するなど現地実習にのぞむ学生たちの姿勢が印象的でした。

翌日は、猪野々山国有林において、歩道作設、地拵えと防護柵設置作業を行いました。作業の開始にあたり当署の岡部次長から、チェーンソーの使用に際して、作業間隔や足下・手元等に十分注意し安全第一で作業を行うよう挨拶があり、現地実習を開始しました。

林業大学での演習

チェーンソー作業

当日は、役割分担のため各班2名がチェーンソーを使用する作業を担っていました。学生の全員がチェーンソーを使用できる資格をもっており、防護ズボンなど装備は万全で、手慣れた動作に関心させられました。

現地は、大小の岩があったり、伐採後の枝条・灌木類が点在しており、大学校の敷地のように作業を簡単に進めることができない状況でした。

それでも、学生の頑張りで午前中には防護ネット設置箇所の枝条整理と歩道の作設は順調に進み、早めの昼食で一息をつきました。

午後は、防護ネット設置と地拵え作業を行いました。傾斜に加え地表面からは見えない石などの障害物に苦戦し支柱やアンカーの打ち込みは思うようにいかず何度もやり直しをしていましたが、ネットの張り上げは、それぞれが分担作業になっており、練習通りといったところでした。

最後に、局技術普及課渡邉係長から林業労働者育成の観点から、今後もこのような支援を継続的に実施して行きますとの挨拶で2日間にわたる実習を無事に終えることが出来ました。

ネットの設置

支柱の打ち込み

千本山登山学習
高知農業高校の生徒が参加

〈安芸森林管理署〉

高知県立高知農業高等学校では現地学習として、毎年森林総合科1年生が千本山登山を行っています。

学習内容は、日本三大美林のひとつでもある魚梁瀬杉について学習することや、森林を調査・評価し、適切に管理する方法を理解することを目的としています。

親子杉で休憩

説明を真剣に聞き入る学生

11月14日に、学生16名、教職員2名、当署からは4名の職員が参加し「橋の大杉、親子杉、たこ足杉、鉢巻き等」の名所を説明しながら巡り、展望台を目指しました。

はじめに、千本山保護林の登山口では「森の巨人たち百選」に選ばれている「橋の大杉」が参加者を出迎え、林齢300年以上、樹高54m、幹周り680cmの木は存在感があり、「でかっ!」と上を見上げる学生の姿が印象的でした。

道中においては、門脇地域統括森林官が千本山保護林の歴史や多種多様な樹木の説明を行い、学生たちは真剣に聞き入っていました。

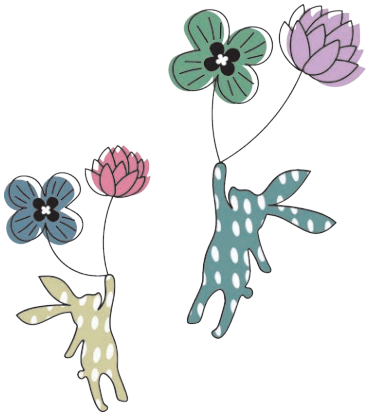
下山後は、森林官の業務を一部体験してもらうこととして、超音波樹高測定器を使った樹高の測定方法、国有林の境界保全業務、ドローンを活用した林野巡視等を実践しました。

当署としては、今回の千本山登山学習を通して、高知県を代表する希少な魚梁瀬スギの魅力を感じて、他の山や森林にも興味を持って貰いたいと感じました。

なお、森林環境教育の普及・啓発に向けた取組については、今後においても機会あるごとに継続していく考えです。

ドローンの実演

空中より記念撮影



「電動クローラ型一輪車と金網製獣害防護柵を使用した造林コストの削減」現地検討会を実施

〈森林技術・支援センター〉

11月16日、嶺北署管内の向山国有林において、高知県、県内各市町村、林業事業体等を対象に、電動クローラ型一輪車と金網製獣害防護柵を使用した造林コストの削減に向けた現地検討会を、森林総合研究所、エルヴェラボ合同会社、日亜鋼業（株）、大紀商事（株）の協力のもと実施しました。

説明の様子

電動クローラ型一輪車操作

当日は、穏やかな晴天の中、県市職員・事業体22名、講師13名、国有林職員29名の64名が参加し、電動クローラ型一輪車で金網製獣害防護柵資材の運搬、設置作業を行い、その期待される効果や課題等について意見交換を行いました。

最初に島内業務管理官が、「新しい技術が造林コストの縮減と作業負担の軽減に大きく貢献することを期待しています」との開会挨拶を行いました。

続いて日亜鋼業（株）から、金網製獣害防護柵の紹介とこれまでに取り組んだ結果から総コスト分析及び防護効果の評価について説明がありました。

その中で、「斜張樹脂ネット柵・縦張樹脂ネット柵・金網柵の3種類を、作設・点検補修・撤去・環境負荷についてトータル比較した場合、状況によっては金網柵が最も低コストになる場合がある」「金網柵は防護性能が高く苗木被害を大きく低減でき、資材強度が高く、補修点検の省力化が見込める。耐用年数が長いため柵の張替えを考慮した場合にコストを抑えられる」との説明がありました。

金網製獣害防護柵設置

次に、エルヴェラボ合同会社より、電動クローラ型一輪車の紹介と、導入時の効果等の説明がありました。「まだ試験的な導入段階で改良すべき点は多くあるが、特徴として、傾斜約35度まで走行が可能で、約60kgの資材の運搬が可能。走破・機動性が高く、急傾斜地走行や造林地の根株や岩石等の障害物の回避が容易である。動力で走行するため直立性が高くバランスも取りやすい、履帯構造で前後方向が安定しハンドル保持の負担が少ない。運搬については人力の3～4倍の運搬能力があり労働負担が軽減され生産性が向上する」等の説明がありました。

その後、参加者は4班に分かれ、一輪車の操作体験と金網柵の設置体験を行いました。

一輪車の操作体験では、資材運搬専用と植栽機を搭載した型の2種類の仕様の違う一輪車を参加者全員が山の緩急斜面を走行させ、機動性・走破性等を確認しました。

金網柵の設置については、シカ防護用と小動物防護用の2種類の防護柵を講師から作成手順等の説明を受けて体験しました。樹脂ネット柵の設置とは違い、作業工程が多いことに戸惑いながらも、金網と金網を結合する独自のシンプルかつ効率的な工具を使用するなどにより制限時間内に完成することができました。

意見交換では、「金網製獣害防護柵では、設置時には何人の配置が効率的なのか。耐久年数はどれくらいか。倒木による破損時の補修方法は」などの質問があり、電動クローラ型一

輪車では、「機械の重心がもう少し手前にあったほうが安定した走行ができるのではないか。履帯の幅はもう少し広いほうが安定するのではないか。山頂付近でバッテリーが無くなった場合はどうするのか。一回の充電での作動時間はどのくらいか」等の質問が出されました。出された質問に対しては講師の皆様から丁寧に回答いただき理解を深めることができました。

最後に、武田森林整備部長から、「この現地検討会を通じ造林コストの低減の取り組みが進むことで林業の発展に寄与することを期待する」との講評をいただき、現地検討会を終了しました。

今回の現地検討会は、今後これらの機材の使用を検討するうえでの改良点などについて意見交換を行い、課題の洗い出しができ、大変有意義なものとなりました。

当センターでは引き続き、「新しい林業」に資する取り組みを進めるための現地検討会の開催を企画していくこととします。

高知県林業土木協会 ボランティア作業の実施

〈四万十森林管理署〉

11月24日、黒潮町入野松原国有林において四国林業土木協会ボランティア作業を実施しました。

今回のボランティア作業は5月19日に締結された「社会貢献の森」における協定に基づき実施したものです。

この協定は、前回締結した協定が昨年度末に終了し、同会より引き続き活動を実施したいとの希望があったため、実施箇所を「入野松原」に変更して新たに締結したものです。

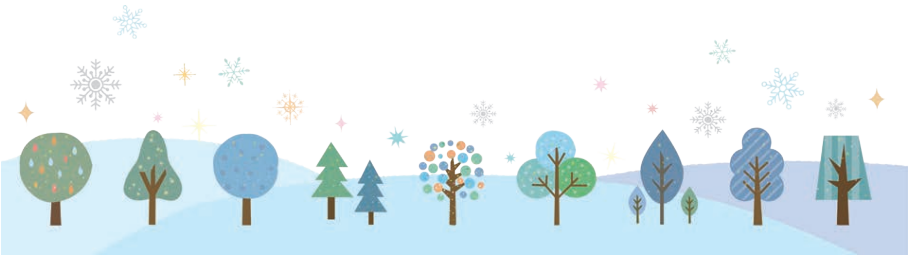
作業の様子

集合写真

入野松原国有林は、防風、潮害防備、保健保安林に指定されていることや、地域住民の憩いの場として利用されており、継続的に整備を行うことが必要であるため、今回の協定の実施箇所に選定されました。

ボランティア当日は、晴天の中、四国林業土木協会から14名、四万十署から6名の総勢20名が参加しました。藤原署長の挨拶、齋藤主任森林整備官の安全指導を行った後、作業を開始しました。作業は3班に分かれて行い、主に歩道沿いに自生している雑草の刈り払いやゴミ拾いを行いました。晩秋になり肌寒い気温ではありましたが、当日は日差しも暑く、汗を流しながら2時間ほどの作業を終え、歩道は見晴らしがよくなっており、有意義な作業であったと思います。

当署では今後も地域に愛される国有林として、様々な活動に取り組んで参ります。



幡多農業高校生徒が自然再生事業地で作業体験

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

高知県立幡多農業高校から四万十川森林ふれあい推進センターに国有林で取り組んでいる事業などについて学習したいとの依頼があり、グリーン環境科3年生14名を対象に国有林の視察や実技学習、野生鳥獣対策の現状と自然環境問題について学習してもらうこととしました。

自然再生事業地案内看板の前で説明

はじめに向かった黒尊山国有林10林班の自然再生事業地は、シカ食害などにより成林が見込めない林地が散在していたことから、各ボランティア団体等と連携したシカ防護柵の設置と併せて有用樹の刈り出しや郷土樹種の植栽、遊歩道の整備等を行い、多様性のある森林再生を目指して取り組んでいることを説明しました。現地の植栽した樹木が15年以上経過し、シカ食害を防ぐための保護材が、樹木の成長に伴い幹部分を圧迫しているため、順次保護材を交換していく必要があります。現在取り付けられている保護材撤去が急がれることから、実習を兼ねて保護材撤去作業を体験してもらうことにしました。

保護材の解体・撤去作業に取り組む生徒

作業にあたり、作業範囲と注意事項、二人一組で取り組むことを説明し、林内に移動しました。最初に、センター職員がナイフ等で保護材を縦に裂いた後、生徒が剪定鋏等で固定リングと結束バンドを切断しました。その後、保護材を取り外し、林内の集積場所まで運搬しました。1時間もかからず約50本の撤去作業を終え、「意外と保護材が硬かった」「これからさらに成長するのが楽しみ」などの感想がありました。

その後、樹木の説明をしながら30分程で滑床山国有林のブナ原生林に到着しました。

撤去した保護材等

ここはブナを主体とした広葉樹林分で登山者に好評の場所ですが、樹木の幹部と根元の樹皮や下層植物がシカ食害を受けており、植生の衰退が林地荒廃に繋がる恐れもあるため、平成18年からシカ防護網や柵などを設置していることを説明し、柵の内側と外側で植物の繁茂状況に違いがあることを理解してもらいました。

帰路途中で黒尊山国有林6林班通称「大駄馬」において、12月以降稼働を予定しているシカ捕獲用の大型囲いわなを見学してもらい、増え過ぎたシカの個体数調整として取り組んでいる捕獲事業について説明し、わなの仕組みや効率良く捕獲するための工夫などを理解してもらいました。

最後に生徒代表から「滅多に経験することがない作業ができたこと、美しいブナの原生林に触れることができたこと、また、シカ食害が多く、捕獲するための方法や、わなの種類も数多くあることが判り大変勉強になりました」とあいさつがありました。半日程度の現地学習でしたが、生徒達は皆満足気な表情をみせながら黒尊渓谷をあとにしました。

大久保山山頂で記念撮影

「奈半利小学校」野根山街道　風景林を散策

〈安芸森林管理署〉

11月11日、奈半利小学校6年生15名、保護者15名、引率教員3名、当署職員6名で野根山街道風景林を散策しました。

この行事は奈半利小学校が「自然に親しむ体験」と「地域の歴史学習」を目的として、30年以上にわたって毎年行われている伝統行事ですが、昨今の新型コロナウイルス感染症拡大により3年ぶりの開催となりました。

野根山街道は奈半利町と東洋町を結ぶ全長約35㎞の山道で、土佐藩の参勤交代路や紀貫之の入国路、坂本龍馬、中岡慎太郎脱藩にも使われた歴史ある街道です。

今回は、宿屋スギ登山口から米ヶ岡までの約7㎞のコースを、約4時間かけて歩きました。

はじめに梶原総括森林整備官から野根山街道の歴史を説明し、豊永首席森林官からは今回のスケジュールや注意事項等を確認し散策をスタートしました。

歩き始めてからすぐに「宿屋スギ」と呼ばれる大きなスギの切株があります。現在は残念ながら、写真のとおり、令和4年の台風15号による被害で一部が倒壊しました。

9月に一部倒壊した宿屋杉の切株

散策途中での旧藩林の巨大な木々やヌタ場と言われるイノシシが体についた虫や汚れを落とすためにドロ浴びする場所に児童と保護者は興味を示した様子で、普段では目にすることのない自然に興味津々でふれあっていました。

昼食休憩後には、豊永首席森林官が児童と超音波樹高測定器を用いた樹高言い当てゲームをしたり、木材の直径を測る輪尺を使った胸高直径の測り方などの体験を通して森林管理署の業務を紹介しました。

旧藩林を散策

後半からは、狭い道や石畳の下り坂など険しい道が多くなり、保護者は歩くのに苦戦していましたが、児童は元気いっぱいに歩いていました。ゴール地点が近づくと、道も比較的平坦になり児童と保護者の差はさほど開かなくなり、全員無事に米ヶ岡まで着くことができました。

下山後の解散式では、児童の代表から、「野根山の豊かな自然に触れることができ、よい経験となりました」との感想が発表されました。

地域の方々が自然や歴史を学び伝えるこの伝統行事が、末永く受け継がれるよう、また児童たちに森林や自然に興味を持って貰えるように引き続き協力していきたいと考えています。

業務体験の様子

松野西小学校で年間を通した森林環境教育を実施

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

四万十川森林ふれあい推進センターでは、松野町立松野西小学校四年生を対象に年間を通しての森林環境教育を実施しています。

11月18日に第5回目の森林環境教育「土にすむ生物と水の土場浸透実験」を実施しました。最初に「土にすむ生物」として土の中の生き物の役割について説明した後、学校の畑や花壇にすむ生物の観察を行いました。観察では、学校の畑や花壇の土を採取し、顕微鏡で土の中の生物を見つけ出しスクリーンにその姿を映して、みんなで観察し、土の中で生活している小さな生き物の存在に気づき、その生き物たちが豊かな土を作る為に大切な働きをしていることを学習してもらいました。

なお、土にすむ生物の学習の様子は地元のケーブルテレビから取材があり、後日放映されました。

次に、「水の土壌浸透実験」では、山の模型を使って「木のある山」と「木のない山」を再現し、じょうろに入れた水を雨に見立てて降らせて時間の経過と共にどういう変化が出るのか実験しました。「木のある山」を再現した模型の観察で、森林の土には小さな隙間がいっぱいあり、まるで大きなスポンジのように降った雨を沢山吸い込んで蓄えることができ、また、森林のフィルターをゆっくり通ることによって雨水は浄化され、きれいな水が作られていることを学習してもらいました。

最後に、児童からは、「山の模型を使った実験とふりかえり学習で、森林のはたらきや大切さがよくわかりました」「土にすむ生物（トビムシやミツマタカギカニムシなど）や、すごく小さく何かわからない微生物を沢山観察することが出来てとっても楽しかった」との感想をいただき、森林環境教育を重ねて実施することで森林のはたらきや身近な自然の大切さ、山・川・海のつながりについての理解と関心を深めてくれていると感じました。

土の中の生物を顕微鏡で観察中

土の中の生物を　スクリーンで観察の様子

山の模型を使った水の土壌浸透実験の様子

実験後、森林のはたらきについて、ふりかえり学習の様子

「丸太切り」で木工品をゲット

〈高知中部森林管理署〉

11月19、20日、香美市物部町大栃の「奥物部ふれあいプラザ」で開催された令和4年度物部地区文化展に参加しました。

両日にわたり、屋外（7団体）と2階（30を超える団体・個人）にそれぞれブースをいただき、国有林の仕事などを紹介しました。

2階の会場は、シカ捕獲用のオリワナ（こじゃんと1号）の展示とモニターによるシカの食害状況などを上映し、獣害の現状と取り組みを紹介しました。

屋外のブースでは、丸太切りの体験を実施しました。挑戦者には、もれなく木工品（接着剤でつなぎ合わせるキット）「森の動物（タヌキ・ウサギ・クマ・フクロウなど）」をゲットできることもあって、2日間で30名以上となり、親子連れの方やお孫さんへのプレゼントとして多くの方に喜んでいただきました。

小学1年生の女の子も、木工品に誘われ初めての丸太（スギ直径約20㎝）切りに挑戦。母親と妹が見つめる中いざ開始、小さな両手で鋸を持ち丸太に押し当て、ゆっくり前後に動かし、おが屑がパラパラと落ちはじめると鋸刃がしだいにくい込んでいき、スッと切り落としました。その瞬間、親子と周りの職員からも思わず拍手がおこり、本人も「にっこり」笑顔をみせ、無事に丸太切りを終わらせました。額には、少し汗をにじませ、切り離した木を持ち達成感に浸っている様子もうかがえました。つづいて、ご褒美の木工品を選ぶ時がきました。見本の完成品を見ながら、袋に入ったキットをじっくり選んでくれました。

5～6種類準備をしていた木工品では、「ウサギ」が来年の干支でもあるので、お部屋に飾りたいとのことで一番人気のようでした。

天気予報では、天候が悪いとのことでしたが、両日とも天気に恵まれて、多くの来場者と文化展を楽しむことが出来ました。このようなイベントをとおして国有林の取組や森林への興味を増していただけるよう今後も取り組んでいきたいと思います。

「梼原松原（久保谷）セラピーロード整備」に参加して

〈四万十森林管理署〉

11月17日に梼原町松原地区で開催された「2022年度　梼原協働の森活動（梼原松原セラピーロード修繕）」の歩道整備に署長外6名が参加しました。

「梼原松原（久保谷）セラピーロード」は、平成18年に認定されたもので、過疎化が進む松原地区に人を呼ぶために、農業用の水路に沿った歩道が整備されたものです。（延長3㎞、平均幅員1.2ｍ）

認定に当たっては、専門的な基準をクリアするのに苦労したとのことで、当時梼原町に出向していた岩本氏や梼原森林事務所森林官（現在、高知中部署猪野々・岡ノ内森林事務所森下嘉晴首席森林官）も尽力されたと聞いています。

今回のイベントは、梼原町と「環境推進企業との協働の森づくり事業」でパートナーズ協定をしている「日本道路（株）」の活動の一環で開催され、今回で5回目の歩道整備です。古くから同地区と当署は関係が深く、梼原森林事務所も同地区にあることと、周辺に「久保谷風景林」、「鷹取山植物群落保護林」があり、モミ、ツガ、ウラジロガシ等の天然林の中に遊歩道を整備していることから、「梼原松原（久保谷）セラピーロード」と合わせて、多くの方々に同地区に訪れていただけるよう、今回のイベントに参加しました。

当日は高知県林業環境政策課、梼原町、日本道路（株）、地域おこし協力隊、まろうど（客人）会及び四万十森林管理署の総勢31名が参加し、歩道沿いの斜面から落ちてきた土砂を一輪車で運び、鍬や鋤簾（じょれん）等を用い、歩道の整正を中心に修繕を行いました。

修繕終了後は、日頃から歩道整備や来訪者へのガイドを務めておられる「まろうど会」の下元会長の案内で歩道（往復6㎞）を参加者全員で歩き、要所でのガイドに併せ、川のせせらぎや、見頃を迎えた紅葉を楽しみました。

当署は、今後も梼原森林事務所を窓口に地元との連携を図り、自然豊かな同地区への協力を約束し、ドローンを用いた記念撮影を行いイベントを終了しました。

旧西ヶ方小学校でクリスマスリース作り

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

12月21日、四万十市立西土佐小学校の2年生10名（うち2名の児童が西ヶ方から西土佐小へ通学）が「生活の教育（地域発見に出かけよう）として、木工体験を通して四万十川森林ふれあい推進センターや西ヶ方地域に親しみを持ちたいとふれあいセンターのある旧西ヶ方小学校にやって来ました。

はじめに、橋口所長から「西ヶ方から西土佐小学校へ通学している児童さんもいるようです。小学校が廃校となって、木造のこの素晴らしい校舎に皆さんが通えないのは残念ですが、今日はこの時期にマッチしたクリスマスリース作りをしますので、みんなで楽しく作りましょう」と話しました。

そして、作り方や材料（家を建てる時の主な材料としてスギが使われること）の説明をして、サンタクロースやトナカイ、雪だるまや教会のかたちに切り抜いたファルカタ材（桐板の代用品）とリースに見立てたスギ板の円盤に自由に色ぬりをした後、接着剤で円盤に貼り付けて、木の実などの自然素材やビーズ等で装飾して思い思いの作品を完成させました。

おわりに、担任の先生が、児童達に「今日作ってみてどうだった」と尋ねると、児童達からは「とっても楽しかった。でも、もっと作りたかった。家に飾りたい」などの感想をいただきました。

今回、児童たちには、木材で作品を作る楽しさを通して木に親しみ、当センターがある旧西ヶ方小学校を知って（西ヶ方地域発見）もらえたと思います。

令和4年度　刃物取扱い研修の実施について

〈四万十森林管理署〉

四国森林管理局管内の公務災害発生状況を見ると、近年、刃物を原因とした災害の割合が多くを占めているところです。そうした状況を受け、四万十森林管理署では署内の若手職員を対象に、刃物の正しい取扱いを学ぶため「刃物の取扱い研修」を毎年実施しています。

今年度は11月8日に黒潮町蜷川の郷ノ谷山国有林で6名が参加しました。昨年度に続き、小松地域技術官、林十和森林事務所森林官を講師に開催しました。

鉈研ぎ実習の様子

午前中、鉈研ぎを行い、最初は均等に刃をあてるのが難しく、苦戦している様子の参加者でしたが、約2時間の講習を経て、研磨の動きも上達したように思います。

午後も引き続き現地にて、鉈・鋸を使った灌木の刈り払い等の実技演習を行いました。正しい角度、姿勢で鉈を使用することで、無駄な力が入らずスムーズに作業が行えるだけでなく、危険な作業の仕方を把握しておくことで、災害のリスクも減らせると感じました。

刈り払い実習の様子

参加者からは「教え方が優しくわかりやすかった」、「こうした学習の場を設けてくれるのはありがたい」などの声があり、計4時間ほどの実習でしたが、技術面、安全面の向上において、非常に実りある研修となりました。

新規採用者の研修日記

香川森林管理事務所
石本　雄大

四国森林管理局にて、11月14日から18日の日程で一般業務研修（基礎全般）を受講しました。

本研修は国有林野職員として業務を遂行する上で必要となる業務全般についての基礎知識の習得を目的に、新規採用者を対象に実施されています。

本来6月に実施する事となっていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から途中で中止となり、11月に変更しての実施となりました。

初日は、保全課、計画課から森林被害や保護林などについての講義を受講しました。その中でも緑の回廊についての内容が印象深く、「ツキノワグマ」のような希少な動物が今後も四国各地で見られるようになって欲しいと思いました。

2日目は、森林整備課・治山課、計画課の講義を受講しました。土木担当者の講義が特に印象深く、林道の構造や管理などについて丁寧に説明していただき、講師の林道事業に対する思い入れの深さが感じられました。私も自分の仕事に誇りを持てるようになりたいと思いました。

3日目は、森林整備課から分収林についての講義を受講後、木材安定供給・木材利用について学ぶために、四万十森林管理署管内にある委託市場と木材生産現場を見学しました。

現場における作業については、座学での基礎知識に加え、現地で実際に見学することで、重機の迫力等も相まって、理解を深めることができました。

高幡共販所での見学の様子
（この木どれぐらいで売れるんだろう）

土場での見学の様子
（生産事業は大変だなあ）

4日目は、森林整備課、保全課および経理課による講義でした。中でも、一番伝えたかったと言われていた「同期は一生同期、かけがえのない存在」という言葉はとても心に残っています。

最終日は、総務課、保全課の講義と、保全課および森林技術支援センターによる実習を受講しました。シカなどの有害鳥獣を捕獲するにあたっては、動物と人間の高度な駆け引きが行われていることがわかり、大変驚きました。有害鳥獣捕獲に対して罪悪感はありますが、国有林内に植栽した苗木などを守るためにも、日々技術の向上を目指す必要があると感じました。

私は今年度採用されたばかりで、知識や経験等はまだほとんどありません。今後も研修などの学びの場を大切にし、諸先輩方からの魂の言葉や、その中で得た知識や経験を日々の業務で存分に発揮していきたいと思います。

また、日頃あまり会うことのない同期との交流も徹底したコロナ感染対策のもと深めることが出来ました。これからもこのかけがえのない仲間たちと頑張っていきたいと思います。

みんなで完成させた囲いワナ
（ちょっぴり緊張しています）